

伊奈波さん

伊奈波神社社報

【平成27年 1月号】 No.24



お正月社頭風景



伊奈波神社宮司

東 道人

奕 葉

新年を迎へ、新たな年の歳の延命息災を祈り、身心とともに正直な心の姿でありたいと思っております。そして、新たな歳を祝いつつ、氏子・崇敬者の人びとと共に歩みを進めたいものであります。

さて、私は國學院大學教授中西正幸編の『伊勢の海と神宮―二見ヶ浦の神々―』（平成八年四月十五日・国書刊行会刊）の「二見浦の蛙」と題する一文で、

安曇系海人族によって開拓されたと伝えられる穂高地方は、これら一族によるものといえよう。また愛知県の渥美は安曇であり、云々

と記述したが、宮地直一博士は『諏訪史』第二巻前編（昭和六年二月）、『諏訪神社の研究』後篇（昭和十二年十二月刊）をものされ、更に『穂高神社史』（昭和二十四年十二月刊）、『熊野三山の史的的研究』（昭和二十九年十月）などを著述され、いずれも名著を遺されている。宮地博士は、私が記述した一文は、既に『穂高神社史』の中で、述べられていることを知ったのである。しかも美濃国厚見郡と郡内に厚見郷とあることを指摘され、

いふまでもなく海には縁を断つが、郷の所在は長良川に沿ひ岐阜市の附近に當る。

といい、厚見は安曇であり、海族あまぞめによって開いた村であった。殊に海のことをアイヌ語では、Atui（アツイ）というが、言語が安曇のアツイ（三）と同義語とも考えられる。そのことを宮地博士は、

近時海を意味するアイヌ語にかけ、又は海住アツイサムの約とする等、云々

と録しているように、既に博士はアイヌ語に注目されている。博士はアイヌ語の近時海をAtui-san（アツイサム）などの言語があるが、むしろAtuiが安曇に近いと思われる。そういつたことから、愛知県の熱田もその一つと考えられる。信濃国に安曇の地名が遺っていることを見れば、海族が河川を溯り、山間を辿り遷居したありさまを思うと、この美濃国の厚見郡、厚見村も海族が開拓した村であり、まさに古い時代のことである。そういつた言語が古代の手がかりであるならば、アイヌの人びとが安曇一族の文化を担った人々の集団であり、信濃国と美濃国の人びとは、宮地博士が言及されるように、

尾張より東に向つて美濃を通り
木曾川を遡つて御坂を越え、

伊那谷に入るもの。

とあるところから、氏族が河川を徒渡りしながら遡っていたのであろう。しかも、安曇一族は銅銚、銅剣、銅戈を土中から発見したところは一族の跡と見定めることが出来ることも指摘されている。

このように美濃の厚見は、まさに安曇一族が切り開いた境土であり、地味豊かな耕織こうしきの地であったのである。

幣殿お屋根葺き替え

昨年、四月下旬よりおこなっておりました神門内幣殿のお屋根葺き替え工事が八月末に完成をみる事ができました。これも氏子崇敬者皆様のご理解とご協力の御事と、有難く厚く御礼申し上げます。また、ご奉賛を賜りました方々のご芳名を記した銅板も葺き納めさせて頂きました。

これまでの葺き替え工事

平成二十年 神門・回廊
平成二十三年 拜殿・燈籠
平成二十五年 校倉・神饌所
平成二十六年 幣殿



幣殿

岩戸の塩奉納

六月二十八日正午、伊勢・二見町の住民らでつくる「二見みしお会」が「岩戸の塩」を奉納されました。岩戸の塩は伊勢市二見ヶ浦で汲み上げられた海水を長時間煮つめて精製せられ、ミネラル分が多く含んでおり体に良いとされており、当社では祭典で使用しています。奉納は平成十三年から始まり、今年で十三回目となりました。この塩は当社でもお買い求めできます。

376g・二四〇〇円
125g・一〇〇〇円



参進

黒龍神社例祭

境内に奥深く静まる黒龍神社の一年に一度の例祭が七月二十四日に盛大に斎行されました。黒龍神社は、古く天文八年（一五三九）に伊奈波神社が当鎮座地に遷座される以前から当地に鎮まり、福徳増進・諸願成就の神様として篤く信仰されてきました。当日は、多くのお供え物が崇敬者より捧げられ岐阜県内外から黒龍大神を慕う約二〇名以上が参列し、厳肅に執り行われました。



鈴祓

アニメ完成

ご祭神の伝承をアニメにした「三つのやしろの物語り」が完成し、七月十四日制作委員長の辻正氏をはじめ岡本太右衛門顧問、杉山幹夫顧問ら制作に携わった関係者が岐阜市役所を訪れ、細江市長・早川教育長に手渡しました。アニメを通して子供達が郷土に誇りを持ち、家族の絆・地域との繋がりを大切にする気持ちを育てたいとDVDを同市教育委員会に寄贈し、市内すべての幼・保育園と小中高等学校に送られました。



白ゆり敬神婦人会

創立五十周年記念総会

当社、敬神団体の「白ゆり敬神婦人会」は、昭和三十九年六月十八日に設立され、今年五十周年を迎えた六月十八日、記念総会が参集殿にて開催されました。婦人会は、年間を通して、初詣、節分祭、花乃撓大祭、例大祭、大黒社祭、黒龍社祭、敬老祭、七五三詣などの年間行事の奉仕をはじめ毎月一日、十五日の境内清掃、儀式殿の清掃など多くの行事にご奉仕頂き、長年にわたり神社の護持運営を支えて来られました。



この日、岐阜県神社庁長宇都宮精秀様、岐阜県神社総代会長岡本太右衛門様をご来賓としてお迎えし、両人からそれぞれご祝辞を賜りました。その後、全国敬神婦人会・岐阜県神社庁・伊奈波神社よりそれぞれ感謝状が授与され、白ゆり敬神婦人会山口志めを会長がお礼の挨拶を述べました。

総会后、記念講演として京都・音羽山清水寺貫主森清範様をお招きし、ご講演を賜りました。「来縁を結ばん」と題し、会場を訪れた婦人会の会員や、氏子の方々が耳を傾け、五十周年の節目の年に貴重なお話を頂きました。

みそぎ神事

七月三十日午後七時、社務所前にて氏子崇敬者参集のもと大祓神事が斎行されました。始めに、人形・切麻を用いて罪穢れを祓い、引き続き大きな茅の輪を左から右へと和歌を唱えながら潜り、その後、祭壇の前で神職が大祓詞を何度も奏上し、併せて短冊に願いを込めた七月短冊祈禱も執り行われました。

また、参道には、ほんごう幼稚園の園児たちが描いた絵を行燈にし、ローソクの灯りで照らす「地べた行燈」が並びました。



提灯まつり

八月十四日夕刻、笹提灯奉納奉告祭が第一鳥居前にて執り行われました。四地区から十四町内の自治会が笹竹に赤丸提灯を付け神社に集まり、町内安全や無病息災を祈りお祓いをうけました。笹竹に付けられた百個以上の赤丸提灯が参道を赤く照らしました。

奉納町内

司町、啓運町、伊奈波通一、木造町、四屋町、本町七、末広町西組、矢島町一中組、本町六、柳生町、末広町北組、新桜町、若松町、末広町南組

順不同



七五三ファッションショー

八月十七日午後二時三十分、今年で七回目となった七五三ファッションショーが参集殿にて開催されました。秋の七五三詣を前に新作の衣装や美容などをみてもらおうと平成二十年より開催。今年七五三を迎える子供達二十六人がモデルとなり羽織はかまや着物、ドレス姿で舞台上を歩き披露しました。一人ひとりポーズをとる姿が約100人の来場者をにぎわせ大盛況のうちに終わりました。



花乃撓講社祭

春の五穀豊穣を祈る祈年祭、秋の収穫に感謝する花乃撓大祭(新嘗祭)の間に、花乃撓世話人を始め講員の無病息災、産業の興隆を祈る講社祭が九月十四日午前十一時斎行されました。

この日、ご神前にはじめて筑前琵琶岐阜旭会の坂口旭穂氏が「那須与市」、中島旭堂氏が「長良川鵜飼」をそれぞれ奉納しました。その後、参集殿にて直会が行われました。



忠魂碑慰霊祭

九月二十三日午後三時、忠魂碑慰霊祭が斎行されました。神社境内にそびえる乃木希典大将の文字が刻まれた忠魂碑には、明治三十七年二月から三十八年九月までの日露戦争でお亡くなりになられた戦病死者三八三七柱(岐阜県下)をお祀りしております。遺族や白ゆり敬神婦人会らが参列し、英霊に感謝し慰霊と顕彰の念を捧げ静かに手を合せました。



ミナモ参拝

「清流の国ぎふ」のマスコットキャラクター「ミナモ」が十月二十六日、神社を訪れました。七五三詣で境内が賑わったこの日、ご祈禱を受ける家族らと一緒にお祓いを受け子供たちの七五三をお祝いし、無事成長を祈りました。その後、子供と一緒に写真を撮るなど参拝者の注目を浴びました。

また、ミナモは自身が出場するゆるキャラRグランプリで良い結果が出るようお参りしました。



松尾流献茶祭

十月三十日午前十時、松尾流による献茶祭が本殿にて二〇〇名余りの参列のなか執り行われました。名古屋を中心に活動をしている松尾流・松尾宗典宗匠のお手前により濃茶・薄茶が奉られました。この献茶祭は毎年斎行されており、今年で九十九回を数えました。祭典後、参集殿にて会員らに抹茶が振る舞われました。来年の一〇〇回は、十一月一日に行われます。



金山神社祭

十一月八日午前十一時、境内に鎮座する金山神社の例祭が斎行されました。御祭神は鉾山や冶金を司る金山彦命をお祀りしております。当日は、金属関係の会社で組織される金山奉賛会が中心となり、境内に篝火を設置し幟を立て会員ら一三〇が参列のなか厳粛に執り行われました。祭典後、参集殿三階にて直会が開かれました。



新嘗祭

十二月一日午前十二時、新嘗祭が斎行されました。春の花乃撓大祭(祈年祭)、四月の例祭(ぎふまつり)同様神社の祭典の中で重要なお祭でこの日は、総代・神社委員・花乃撓講員・白ゆり敬神婦人会の方々、約一〇〇名が参列。今年の稔りに感謝し、それぞれ代表者が玉串を捧げました。祭典後、参集殿直会会場にて濁酒が振る舞われました。



皇位はなぜ男系継承でなくては

ならぬか

竹田 恒泰

例外なき男系継承

これまで我が国には二五代の天皇のうち八方十代の「女帝」(女性天皇)の例がある。「八方十代」というのは、讓位後に再度即位された女帝が二方いらつしやつたことによる。

そのうち、六方八代は飛鳥時代から奈良時代にかけての二百年間に集中し、その後八百年以上女帝はなく、江戸時代になって二代の女帝の例を見る。女帝は、特別な事情がある場合に限ったもので、次の男系男子が即位するまでの中継ぎ役だった。そのため、女帝は一代限り認められるものであり、女帝の子孫が皇位に就くことはこれまで一度もない。一旦女性が皇位に就くと、生涯未亡人、もしくは未婚を貫かなければならない不文律があった。女帝が一代限りとされたことで、皇位はこれまで例外なく歴代天皇の男系の子孫によつて継がれてきた。

けない。例えば、現存する世界最古の木造建築である法隆寺は、その学問的価値の内容にかかわらず、最古故にこれを簡単に立て替えてはいけない。同様に、天皇は男系により継承されてきた世界最古の血統であり、これを断絶させることはできない。

男系継承とは家の領域の問題

男系継承は男女の性別の問題と勘違いされるが、そうではない。いうなれば家の領域の問題であり男女は関係ない。男系継承とは、「皇統に属する方に天皇になつてもらう」ことに尽き、それは皇室以外の人が天皇になるのを拒否することに他ならない。民間であっても、息子の子に家を継がせるのが自然で、娘の子たる外孫に継がせるのは不自然である。愛子内親王殿下の即位までは歴史が許すが、そのお子様が即位したら、父系を辿つても歴代天皇に行きつかない、原理の異なる天皇が成立する。

民間ならば、継承者不在でも、外孫を養子にとつて家を継がせることもあるだろう。しかし、天皇はその方法とはれない。継承者がいなくなる度に養

女帝は一代限りの暫定政権

多くの女帝が出現した奈良・飛鳥時代は、まだ皇位継承の制度が整つていなかった。そのため、天皇の代替わりに混乱が生じやすく、暫定的に女性が天皇になることがあった。

最初の女帝・推古天皇は欽明天皇の皇女で、敏達天皇の皇后だった。敏達天皇が崩じると弟の用明天皇が即位するも間もなく崩御となり、続けてその弟の崇峻天皇が即位する。しかし、後継者が決まる前に崇峻天皇が暗殺されたことで、政治混乱の中、皇位継承を巡る争いを避けるため、皇太后の推古天皇が天皇に即位した。これより争いは回避され、次世代への筋道がつけられたのである。二番目の女帝・皇極・齊明天皇も、同様に争いを避けるために成立した。

三番目の女帝・持統天皇からは成立の背景が違ってくる。天武天皇の次に子を取るようなことがあれば、伝統的な血統の原理に基づかない天皇が成立することになり、それはもはや天皇ではないのである。

また、男系継承は女性蔑視の制度だという人がいる。これも大きな間違いだ。歴史的に天皇は民間から幾多の嫁を迎えてきた。近代以降でも明治天皇・大正天皇・今上天皇の后はいずれも民間出身であらせられる。だが、皇室が民間の男性を皇族にしたことは、かつて一度もない。男系継承とは、女性を締め出す制度ではなく、むしろ男性を締め出す制度なのである。民間の男性が皇族になる可能性はない。

皇族の減少への対策は必要

ところが、このままでは将来的に皇族が減少し、皇位の安定的継承に問題が生じる可能性が高い。現在皇室には天皇陛下の他に、十九方の皇族がいらつしやるが、その内女性皇族が十四方であるのに対し、男性皇族は五方と少ない。皇位を継承できる皇族男子は、陛下の子の世代には皇太子殿下と秋篠宮殿下のお二方、また、孫の世代には秋篠若宮殿下のお一方のみ。

は草壁皇子が皇位を継ぐ予定だったが、若くして亡くなったため、その子珂瑠皇子を継承者とした。しかし皇子は若かつたため、女帝・持統天皇が成立し孫の成長を待った。

また、四番目の元明天皇は子の成長を待つため、五番目の元正天皇と六番目の孝謙・称徳天皇はそれぞれ弟の成長を待つために女帝となった例である。

一方、江戸期に八五九年ぶりに成立した七番目の女帝・明正天皇はまた違った成立背景を持つ。朝廷と幕府間の政治的摩擦の結果成立した女帝だった。後水尾天皇は紫衣事件などで幕府と深く対立し、天皇は不快感をあらわに退位し、幕府への抗議の意味を込めて、まだ七歳の内親王を即位させた。八番目に最後の女帝となった後桜町天皇は、弟の桃園天皇が若くして崩じ、その皇子も幼少であったために、伯母が甥の成長を待つ形で即位した例である。

男系継承は世界の常識

ではなぜ天皇は男性であることが原則なのだろうか。これにはいくつか理由がある。今後皇族がご誕生になる可能性があるのは、将来秋篠若宮殿下がご結婚あそばされた後であり、今後皇族が増えることは期待できない。それどころか、二十代の未婚の女性皇族方は遠くない時期にご結婚とともに皇籍をお離れになるため、今後皇族は激減することが確実であるばかりか、悠仁親王殿下の御即位により、宮家は一つもなくなるがほぼ確実である。

ところが、皇族を確保するために、如何なる手段を講じてもよい訳ではない。女性宮家創設とは、すなわち女性皇族が民間から婿を取ることを意味する。もしこれが現実のものとなれば、皇室の歴史上、初めて民間出身の男性が皇族の身分を取得することになる。そして、その子や孫が将来の天皇となった場合、男系継承の原則が崩され、初の女系天皇が誕生することになる。

女性宮家創設というのは一般人の耳に優しく響くだろう。しかし、女系天皇論者は、女性宮家創設の皮をかぶつた女系天皇論にほかならず、「禁じ手」といふべきである。

理由があるが、宗教上の理由が一番分かりやすい。

日本の天皇は「祭り主」であり、他国の「王」とは性質が全く異なる。世界には宗教的権威はいくつか認められるが、キリスト教でも歴代のローマ法皇と枢機卿は全て男性であり、チベットの・ラマ教のダライラマ、ユダヤ教のラビ、イスラム教の神職なども男性でなくてはならない。このように、宗教的権威を男性に限ることは、世界の宗教の常識といえる。

では、なぜ皇位は男系によつて継承されてきたか。これに答えるのは容易ではない。そもそも、人々の経験と英知に基づいて成長してきたものは、その存在理由を言語で説明することはできない。なぜなら、特定の理論に基づいて成立したのではないからだ。天皇そのものが理屈で説明できないように、その血統の原理も理屈で説明することはできないのである。

だが、理論よりも前に、存在する事実がある。男系継承の原理は古から変更されることなく、現在まで貫徹されてきた。これを重く捉えなくては

旧皇族を皇族に復帰させるか、もしくは皇族が旧皇族から養子をとれるようにすることで、天皇の原理を保ちながら皇統を安定させることができ。現代日本人は、先祖から国体を預かり、子孫に受け継ぐ義務がある。



【竹田恒泰 プロフィール】

昭和50年(1975年)、旧皇族・竹田家に生まれる。

明治天皇の玄孫にあたる。

慶応義塾大学法学部法律学科卒業。

全国各地で真実の日本を教える「竹田研究会」という勉強会を展開している。

【代表的な著書】

『日本はなぜ世界でいちばん人気があるのか』

(PHP研究所)

『現代語古事記(学研ブリッキング)』

『日本人が生使える勉強法』(PHP研究所)

(DVD)

『DVD古事記完全講義入門編』

『DVDボックス・古事記完全講義』

『ロシア！領土を還したまえ！』

身近な神様が一番

寺と神社の旅 研究者

吉田 ちひろ

わたしは高校卒業までの十八年間に岐阜市内で過ごしました。実家は長良川の北側、金華山と岐阜城がよく見える場所で、物干し台は花火見物に最適です。東京の大学に入り、クラスメイトに「隅田川の花火を見に行きましよう」と誘われた時は、ちよっとびつくりしました。えっ、花火つて、わざわざ電車に乗って見に行くものなの？ 隅田川まで出かけて行って、またまたびつくり。川の水つて、こんなに濁っているのね。その後、長良川が、全国的にも有数の美しい川であることを知りました。

高校時代の私の頭の中にあつたのは、花の都、東京への憧れだけ。おしゃれなブティック、ケーキ屋さん、コンサートホールなど、当時の岐阜にはなかったものばかりを数え上げていたのですが、今にして思えば、岐阜には東京に

縁的な関係にあつた一族がお祀りした神様のことで、多くはその一族の先祖神か守護神です。一方産土神は、自分が生まれた土地の神様のこと。昔の人は生まれた場所で一生暮らすことが多かったため、皆、産土神を知っていたでしょうが、現在は転居が普通になったため、氏神も産土神も知らない人が多いでしょう。わたしも自分が生まれた場所には行ったことがないので、本当のところはわかりませんが、そこま

で厳密なことを言わなくても、幼少のころより親しんだ伊奈波さんを、「産土神のようなもの」と思ってお参りすればいいんじゃないかと思っています。はじめの遠足が伊奈波神社でした。ようやく庶民の手が届くようになったバナナをリュックサックに入れてもらったのが嬉しかったことを覚えて

いません。初詣に来た時は、参道の露店で「秘密のアッコちゃん」のお面が欲しくて、母におねだり。お参り前に買うとバチが当たるから後でねと言われたけれど、結局買ってもらえず、気がついて泣いた時はもう手遅れ。思え

はない素敵なものもたくさんあつたんですね。人は、幼いころから自分の回りにあつたものや、すでに自分の手の中にあるものの値打ちに気づきにいく、よいものは遠くにあると考える性質を持つています。わたしの場合は、神社仏閣に関してもそうでした。以前は、身近な神様よりも、遠くの有名な神社に祀られている神様の方がありがたいと思つていたのですが、それは間違

いだということが、ようやくわかって来ました。わたしは大学卒業後、雑誌の編集者として長年会社勤めをしていました。そして十年ほど前にフリーのライターとなり、お寺や神社を旅して雑誌記事や本を書く仕事を始めました。まだパワースポットという言葉が流行する前のこと。わたしも以前は、お寺

ばあれが、人生の厳しさを知った最初

だつたのかも知れません。高校生の時には、現実の非情さを思い知る出来事もありました。仲良くしていた後輩の女の子がきれいな振袖を着て初詣に来ていて、あれ、振袖つて二十歳になつた時に着るものなんじゃないのかなと思つたら、彼女は病気で、その三カ月後に亡くなつてしまつたのです。たぶん彼女は、自分が二十歳まで生きられないであろうことを知つていたのに、伊奈波さんの参道でわたしを見つて、「センパイ、会えて嬉しい」と駆け寄つて来てくれた。あれが、彼女の姿を見た最後になりました。

このようにして、伊奈波さんは、成長過程にあつたわたしに、いろいろなことを教えてくれました。それから何十年もが過ぎ、この間、正直言って、伊奈波さんのことを思い出すことはあまりなかつたし、また、神様の方でもわたしのことは忘れておられたかも知れません。でも、お会いした瞬間に、おおそう言えば、こんな子もいたなと思ひだしてくださつた。小さいころは体が

や神社は観光に出かけた際にちよつと寄るくらいのものでしか思つていませんでしたが、ある時奈良の室生寺に行き、仏像を見ているうちに、その背後にある仏教についてもっと深く知りたくなり、少しずつ勉強をしながら旅をするようになりました。そして、もともと編集者だつたことも幸いし、それに関する本を書くのが仕事になつたのです。

そのうちに神道にも興味が湧いてきて、ずいぶんたくさん神社も巡りました。どこの神社にも奥深い歴史があり、知れば知るほど日本という国が面白くなってきました。最初のうちは奈良や京都を中心に旅をしていたのですが、それ以外の地方にも足を伸ばすようになり、長野県の善光寺や諏訪大社などに何度も通いました。滋賀県の仏像に関しては、本も一冊書きました。でも、ちよつと待って。わたしは、お隣の長野県や滋賀県に詳しいのに、なぜ故郷の岐阜県の神社について何も知らないの？

これはまずいと思ひ始めたものの、弱くて幼稚園に通うのも大変だつたが、今じゃ貰禄もついて立派なおばさんになつたじゃないか。そんな言葉をかけられたようにも感じました。

わたしはこれまで、ずいぶん好き勝手かこの年まで生きて来られたのは奇跡だと思ひます。それはきつと、お参りしてきたたくさん神仏が守つてくれたおかげです。そして、その中の一番の大將が、わたしを小さいころから見てくれていた伊奈波さんだつたんですね。正しい意味での産土神は、一生、自分の専属の神様であり続けてくれるというのですが、そこまで密度濃いお付き合いでなくても、こつと、思ひ立つた時にお参りに行ける神様がいらつしやるのは心強いものです。しよつちゆう会うわけではないけれど、顔を合わせれば、すぐに世間話で盛り上がる同級生みたい。友達が多いほどいい、そして親しい神さまもたくさんいた方が、人生が豊かになりますよね。この年になって、わたしはようやく自分の手の中にあるものの素晴らしさ

忙しさに紛れてなかなか手が回らなかつたのですが、ある方にご縁を開いていただき、天の啓示のように、伊奈波神社さんでお話をさせていただく仕事舞い込みました。その打ち合わせで本当に久しぶりに伊奈波さんを訪れてみて、わたしは思ひました。なあんだ、これまで数えきれない寺社に行つたけれども、ここが一番だつたんだ。

建物はいきれいななり、見かけはずいぶん変わりましたが、子供のころ、両親や祖母に連れて来られた時に感じた嬉しさはそのままでした。そのころはお参りすることの意味もまだ知らなかつたけれど、伊奈波神社の神様は、そういう無垢な子供をこそ愛してくる存在だつたんじゃないか。そして、遠い東京で仕事をするわたしを、気づかないうちに見守つてくれていたのかも知れない。二十年以上来ていなかったのに不思議な親近感が湧いてきて、わたしはふと、そのように思つたのです。神道を勉強して行く過程で、わたしは「氏神」と「産土神」という言葉を知りました。氏神とは、古代の社会で血

に気づいたので。いささか遅きに失したかも知れませんが、これから岐阜の神社についてもっと勉強し、全国にその魅力を伝えるお手伝いが少しでもできればと思ひています。



【吉田ちひろ プロフィール】

岐阜高校を卒業後、早稲田大学第一文学部にて美術史学を専攻。卒業後、編集英社に入社し、ノン編集部でファッションページを担当。退社後、フリーとなり、寺、神社、仏像などをテーマとした単行本、雑誌記事を数多く書く。旅の企画や各種講座の講師なども務める。著書に「京都仏像をめぐる旅（集英社）」「神様と出会う神社の旅（青林堂）」「明日がちょっと幸せになるお地藏さまのことば（ティスカー）」など。